

上京 史蹟と文化

VOL. 6 1994

美を創る

上京の史蹟⑥

上京区民薪能

ふれあい文化大学

ふれあい史蹟ウォーキング

写真コンクール

秋の茶会

読者の声

上京クイズ「これはどこでしよう?」



美を創る

千家十職（塗師）

十二代 中村宗哲

京都市上京区武者小路通新町西入

なかむらそうてつ

写真と文・中島孝迪

上京区武者小路新町西入、官休庵（武者小路千家）の東側に隣接し、枳殻の生け垣を囲らした屋敷が、十二代中村宗哲邸である。

中村家の祖先は、秀吉の四家老の一人、中村式部少輔の家臣・中村某であるが、大坂夏の陣（一六一五）の際、京都・武者小路の現在地に隠棲、茶の湯三昧の余生をすごしたと言う。この隠棲の士の息子が初代宗哲である。

当時、中村家の西隣は、戦国の武将・福島正則血縁の吉文字屋・吉岡与三右衛門という塗り物師の大邸宅であった。そこへ、千利休の孫・宗旦の次男が婿養子として入り、吉岡甚右衛門と称し家業を継いでいた。しかし、彼は茶道への念断ち難く、やがて再び千家に

戻り、千宗守として、官休庵を興した。その際、自分の娘を隣家の宗哲の妻とし、吉文字屋の屋号と塗師の技術をも宗哲に与えたと言われている。以来、三百八十年、千家の職方として茶の湯の盛衰と共に今日に至った。

八代宗哲（一八二八—一八八四）の嘉永七年（一八五四）四月、御所炎上の余波をうけ、武者小路一帯はことごとく焼失、同年中に家屋は再建するものの、幕末動乱の巷と化した御所周辺は、京都守護の名目で入洛した各藩によって蹂躪じゅうりんされる憂き目に遭う。中村家も例外ではなかった。慶応二年（一八六六）、備前・池田藩によつて接收され、住居を転々とする仮住いの月日が続いた。苦難はこれだけではなかった。幕末から明治にかけて、茶の湯は衰退し、その生活は難渋の日々であつたといふ。しかし、こうした中、時代の対応に敏感であつた八代宗哲は、進取の気性もあつてか、米国大博覽会などに創作作品を数多く出品、よくその窮状を凌いだといわれている。

十二代宗哲さんは、昭和七年、中村家の長女として生まれ、京都市立美術大学（現・芸術大学）工芸科を卒業。昭和六十年、先代元斎宗哲の跡目を継ぎ十二代を襲名された。

宗哲さんは「代々がそうであつたように、利休形の伝統を守りつつ、お家元の「好み」を尊重して制作しています」と言われる。しかし、年二回、春秋に催される個展では、独自の「用の美」を創作発表されている。

静淑な横顔に、家系の伝統を踏まえ、現代の創作に打ち込む宗哲さんの並々ならぬ覚悟を見た。



上京の史蹟

その六

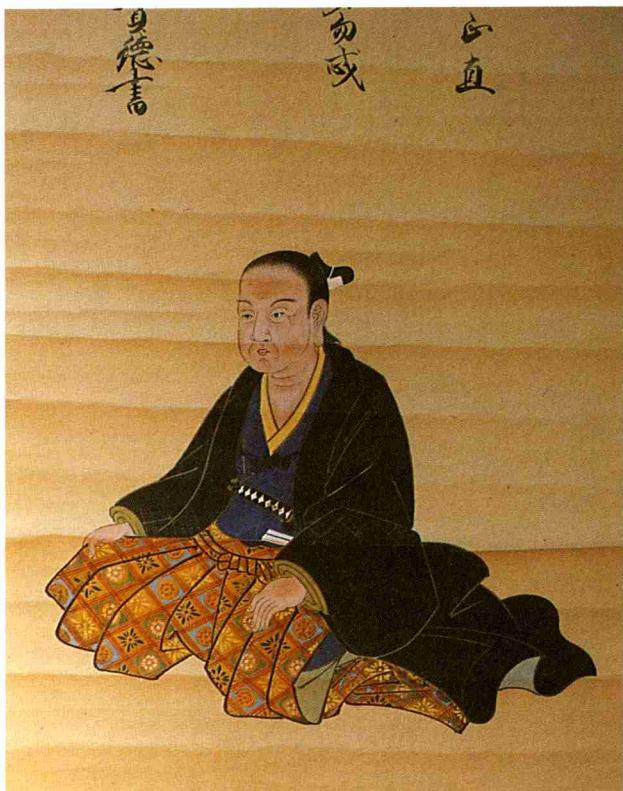
上京の歴史的推移

江戸時代（その三）

学問と医療の街・上京

中世末から近世初頭にかけての京都の街に町人文化が台頭し、文化的土壤において根強いものを持っていました。一方、学問の面で見ると、曲直瀬家、半井家などの医家が多く上京に住居を構え、儒学の面では、伊藤仁斎、山崎闇斎の両巨頭が堀川を挟んで学問所を開いておりました。尚、文政五年の『平安人物誌』によりますと、京儒者にあげられた七十二名のうちの半数近くが、この地で塾を経営していたと言われています。

山崎闇斎は、元和四年（一六一八）、京都の鍼灸の家に生まれました。幼少時代、非常に腕白であったため寺にあ



山崎闇斎肖像画 出雲路家藏

とり、土佐の地を追放されます。これによって再び京都に戻った彼は、還俗し、儒家としての道を歩みます。闇斎二十九歳の時であります。

明暦元年（一六五五）、闇斎は下立壳橋西の北福大明神町で初めて講席を開きました。闇斎の学問は、それまでの京学が一面にもつていたような博学多識の机上の学を退け、南学の伝統を受け継いだ実践的なものであります。彼は、朱子学を絶対視しましたが、その思想内容に立ち入ってみると、朱子絶対の枠内で、その論説を闇斎なり

しかし一方、儒教道徳を単なる形上の理念ではなくて、具体的な実践論理として捕らえようとする志向は、理念の超越性や絶対性を見失わせることにもつながりました。彼はそれを、朱子への絶対信奉によって繕おうとしたので、その思想体系は非合理なものになっていました。闇斎晩年の神道説においても、このような「朱子信仰」の延長線上にあったと言わせております。しかしながら、それには、闇斎学の根底にある鋭い問題意識と、単純

だけられ、やがて妙心寺にて剃髪、その後、土佐の吸江寺など、仏門の世界に生きました。二十五歳の時、闇斎は朱子学の学統が伝えられる土佐の地で、仏門を脱して儒家となる決心をします。しかし、これは藩侯の怒りを招く結果

となり、土佐の地を追放されます。これによって再び京都に戻った彼は、還俗し、儒家としての道を歩みます。闇斎二十九歳の時であります。

明暦元年（一六五五）、闇斎は下立壳橋西の北福大明神町で初めて講席を開きました。闇斎の学問は、それまでの京学が一面にもつていたような博学多識の机上の学を退け、南学の伝統を受け継いだ実践的なものであります。彼は、朱子学を絶対視しましたが、その思想内容に立ち入ってみると、朱子絶対の枠内で、その論説を闇斎なり

しかし一方、儒教道徳を単なる形上の理念ではなくて、具体的な実践論理として捕らえようとする志向は、理念の超越性や絶対性を見失わせることにもつながりました。彼はそれを、朱子への絶対信奉によって繕おうとしたので、その思想体系は非合理なものになっていました。闇斎晩年の神道説においても、このような「朱子信仰」の延長線上にあったと言わせております。しかしながら、それには、闇斎学の根底にある鋭い問題意識と、単純に取捨選択して独自の見解を打ち出し、闇斎的思想や理解が生まれてきます。そのよい例が、闇斎学の中心をなす敬義内外」とはもともと内面の精神と外に現れる行為について言うもので、朱子では敬をもつて内を直くし、義でもつて外を方正にするのが内外合一の道であると説かれていました。しかし、闇斎は形而上の精神と形而下の行為との区分を、個人と社会との区分に置き換えて解釈しました。この時代からあからさまになってきた近世人の内面的な個性の自覚と、外の封建的道徳との矛盾の解決の為、あえて朱子学を曲解しても敬義を中心とする実践論理を強調したのです。

明快な敬義の実践論理の強調などは、多くの門弟を招くことになりました。

闇斎の門に学んだ人々は崎門学派と呼ばれます、その数は六千人にはぼると言われています。大別して儒学派と神学派に分かれ、この中からは諸藩の教學に携わることによって、崎門学を全国に広める役割を果たした者も少なくありません。

下御靈社の神主であった出雲路信直が闇斎の門人であつたために、末社として垂加社が営まれ、その傍らに顯彰碑が立てられています。

伊藤仁斎は寛永四年（一六一七）、堀川勘解由小路（下立売通）上の鶴屋七右衛門の長子として生まれました。家業は材木商であつたとも言われておりますが明らかではありません。しかし、その親戚関係から見ても上層町衆であり、寛永文化圏内にあつたことは確かだと思われます。

仁斎は十代から儒学に志を立てておりましたが、二十九歳の時、病に冒され、それを契機として、弟に家を任せ別宅に引き籠ります。それからの十一年間が、仁斎の思想形成にとっての重要な時期になりました。その間、「仁説」を著わして仁斎を号するようにな

り、三十六歳にして家へ帰り塾を開きました。「古義堂」と名付けられたその塾は、堀川を挟んで闇斎の塾に程近く、互いに門戸を張り合うことになりました。門下の中心は、公家出入りの高級医師や上層町衆の子弟、そして他国級の武士、町人などがありました。地元での彼の交友や門弟は、このように上層階級を中心としており、闇斎のそれとはかなり階層の差がありました。

仁斎の思想内容は創作的ではあつたものの、「孟子」の内容を強く受けていました。個人の自覚と封建道德との対立という現実社会を明確にとらえ、個人と道徳の統一について「四端拡充の説」を唱えます。仁斎によれば、人間は生まれつき惻隱（じへい）・同情・羞惡（しゆおく）・辭讓（じりょう）（謙遜して他人に譲ること）・是非の四端の心を持っており、その四端の心を拡充して仁義礼智の徳、つまり封建道德に達するのが學問修業であると説きました。あくまでも封建的人間に達する過程を追及し、外なる封建道德を人間の主体性においてとらえるという、自發性への信頼が込められていました。



「古義堂」伊藤仁斎邸

仁斎の門人である堀川学派の人々は、長男の東涯によれば一千人に近かつたと言われております。飛驒や佐渡、壱岐などの二、三の国を除くと、ほぼ全國から集まつてきました。おもな門人のうち、京都で子弟を教授したものには北村篤所・並河天民・小河立所・中島浮山・大町敦素・三重松庵・田中東泉らがあり、京に住んだ医者では平井春益・原芸庵・香川修庵・渡辺通真・伊藤木庵らがあげられ、そのほか、諸藩に仕官した者も少なくありません。また、彼は子供にも恵まれ、五人の男子はいずれも学者となりました。長男の東涯があとを継ぎ、他の四人はそれぞれ地方の諸藩に召し抱えられました。東涯は仁斎の死後、遺稿を整理刊行し、家学を広く盛んにしました。古義堂は、東涯の努力によって仁斎没後も衰えず、東涯の後、東所・東里・東峰・轄斎と代々引き継がれ、明治にまで及びました。

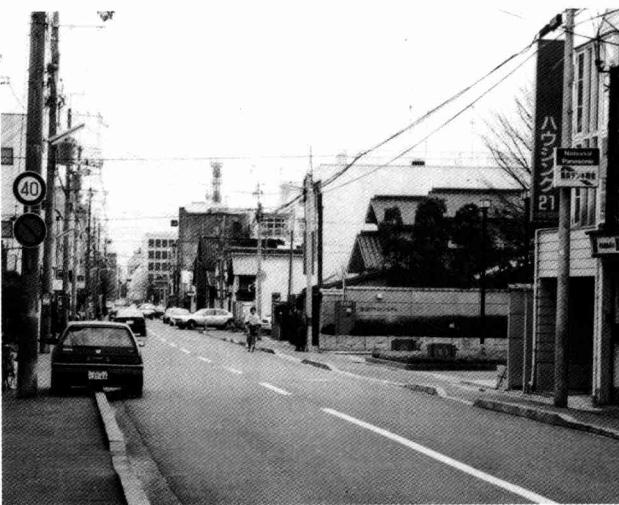
曲直瀬道三は永正四年（一五〇七）、京都・柳原に生まれました。十歳にして仏門に入り、十三歳で相国寺に移ります。二十三歳の時、関東に渡り経史を学んだ後、明國留学より帰った田代三喜に入門して十三年間、李・朱医学

を学びました。天文四年（一五四五）政治、文化の中心地である京都に戻り、再び俗人に帰って医を專業としました。

医学者としての道三の名は広まり、將軍義輝をはじめ知名士により手厚くもてなされ、帰京の翌年、新町通中立売下るに啓迪院（けいていん）という学舎を開き、その門弟は八百人（一説に三千人）と伝えられています。この年代は、世界史的に見ても大きな変革期でありました。一五四三年のコペルニクスによる地動説や、ヴェサリウスによる人体解剖書『ファブリカ』が刊行されました。国

内においても種子島の鉄砲伝来をはじめ、天下統一の気運がみなぎっていました。

道三の著述として知られているものは、五十数種を数えますが、その中でも道三医学を知る上で最も代表的とされるのは、『啓迪集』八巻（天正二年〔一五七四〕刊）で、同年、正親町帝にも献じられています。室町以前の我が国では、中国医学が主軸であります。道三は中国医書の精髓をもとに、数十年に亘る独自の経験を加え、中国医学を取捨選択して臨機応変に運用しました。医療の基盤を僧医による仏教的医学感から儒教精神の上に成り立つものとし、彼によつてはじめて医学の日本化が行われたと言つても過言ではありません。また、道三流医学は、後におこつた古方派に対し、後世派と呼ばれ、李・朱医学を根底としています。啓迪院からは秦宗巴・施薬院（せいやいん）全宗・曲直瀬玄朔・正琳・正純などが世に出ました。



「啓迪院」のあった新町中立売下る付近

本玄治・餐庭東庵・野間玄朔は、幕府に召されて江戸に行き、その門からは岡

琢・山脇玄心・井上玄徹・長沢道寿らが輩出し、正純の門からは古林見宣・林市之進・堀正意らの秀才が出ました。このようにして、後世派は戸内幕府の朱子学を官学とする政策と相乗り合つて、幕末まで日本医学の主流を形成し、その影響は今日まで生き続けております。

烏丸通の中立売御門の北側には、江戸時代の内裏図で見ると「施薬院」と書かれた広い屋敷がありました。ここには当時、院使の施薬院三雲氏が住んでおり、医療福祉施設として市民に無料で薬物供与がなされていました。施薬院とは現在の国立病院の起源とされ、天平二年（七三〇）、皇后宮職に設置されました。

天長二年（八二五）には官制を改め令外官とし、その長官を院使と呼びました。院使は、典薬寮（現在の厚生省）の典薬頭とならんと医道最高の地位とされました。

康平三年（一〇六〇）、丹波雅忠が院使に任せられてからは、代々丹波家の典薬頭とならんと医道最高の地位とされました。

この社会医療施設たる施薬院は、戦国乱世の間はほとんど作動することは

ありませんでしたが、豊臣秀吉の天下統一と同時に、再生しました。秀吉は、御所の近くに院を復興することを決め、施薬院全宗を院使に命じました。全宗は江州・甲賀郡の出身で、医を曲直瀬道三に学び、院使拝命後は施薬院を姓としました。全宗の没後、養子秀隆があとを継ぎ、その後、江州の三雲宗伯が養子となり、徳川家康、秀忠から厚い信任を受けました。

明治元年（一八六八）四月、典薬院頭錦小路頼言は官許を得て、施薬院三雲宗順邸に病院を開設しました。三雲家の墓は、今出川寺町上るの十念寺に今も残っております。

尚薬法印畠黄（はたぢやう）山は、名は惟和、通称畠柳景（はたぢやうけい）になります。天明二年（一七八二）十一月、御所のすぐ西方にあたる近衛町に新しい学舎を建設し、「医学院」と名付けました。現在は、京都YWCAが建つ、室町通出水上るで、今日その遺構を示すものは残っておりませんが、記録に因ると、東側に講堂、西側には書室を設け、内外の莫大な量の書物が整然と並び、その左が客殿、右には学生の読書室があつたと伝えられます。

「医学院」があつた現京都YWCA



その施療は大変なものであります。それでも、彼は一日も休むことなく門弟を指導して熱心に施療にあたつたのを記念して、彼の墓には「天明の大火」によつて焼失し、その後は再び昔日の隆盛を極めることはなかつたのです。

黄山の墓は、現在、下京区松原通大宮西二丁目南側の中堂寺にあります。

彼の教育方針は、まず、聖賢の書物をよく読み、人間としての基礎が十分に出来上がつた後、医療に携わることを主眼としていました。そのため、儒者を招き、学徒に六経孔子の書を学ばせ、その後に彼自身の著書である『医学院学範』『学範』をテキストとして医学を教えたのです。その主なものは、医經、經方、兒科、女科、瘍科、鍼灸、本草の七科であり、鍼灸、本草などについてはそれぞれの専門家を招いて講義をさせたといわれています。

当時、医学院には連日病人が溢れ、その施療は大変なものであります。それでも、彼は一日も休むことなく門弟を指導して熱心に施療にあたつたのを記念して、彼の墓には「天明の大火」によつて焼失し、その後は再び昔日の隆盛を極めることはなかつたのです。

で、患者は益々増え、一時はその数一千余人といわれるほどの盛況であったと伝えられます。しかし、このように盛況を誇っていた医学院も、天明八年（一七八八）、京都を襲つた世に言う「天明の大火」によつて焼失し、その後は再び昔日の隆盛を極めることはなかつたのです。

黄山の墓は、現在、下京区松原通大

（一七二二）、九十六年の長い生涯を終えました。尚、二代目から八代目までは、現在地で医業を開いており、四代目以降は仁和寺宮の侍医をつとめました。奥渕家には多くの古文書が今も尚、現存しています。その中には、初代中庵の肖像画をはじめ、曲直瀬玄朔から中庵にあてた書翰、古い薬の看板などがあります。

しかし、同家最大の歴史的価値はその建物にあるといえます。現存の医学

来伝えられている薬『蘇命散』と『たくま』の伝統を守りつつ、現代的に改良して製造販売しておられます。

現当主十一代修吉氏は、初代中庵がそのまま残り、今でもそこで子孫が生活されています。これはまさに希少価値であり、他では順正書院（天保十三年「一八四二」頃完成）ぐらいであります。



奥渕家

菓匠 本家玉寿軒

〒602 京都市上京区今出川大宮東入
TEL (075) 441-0319
(075) 414-0319

史跡のほとんどが、墓地や石碑だけであるのに対し、奥渕家は当時の建造物がそのまま残り、今でもそこで子孫が

QUICK News

京都の秋を彩る恒例行事となつた「上京区民薪能」は一十九回目を迎えて、九月二十一日に白峯神宮の特設舞台で開催されました。この薪能は上京区内に住まわれている多くの能楽をはじめ邦楽関係者のご協力によつて行われています。

夕方四時からの第一部は、上京区民によつて舞囃子、仕舞、琴の演奏が披露され、薄暗くなつた六時に火入式のあと、この日、特に足を運ばれた田邊朋之京都市長の挨拶があつて第二部に入りました。

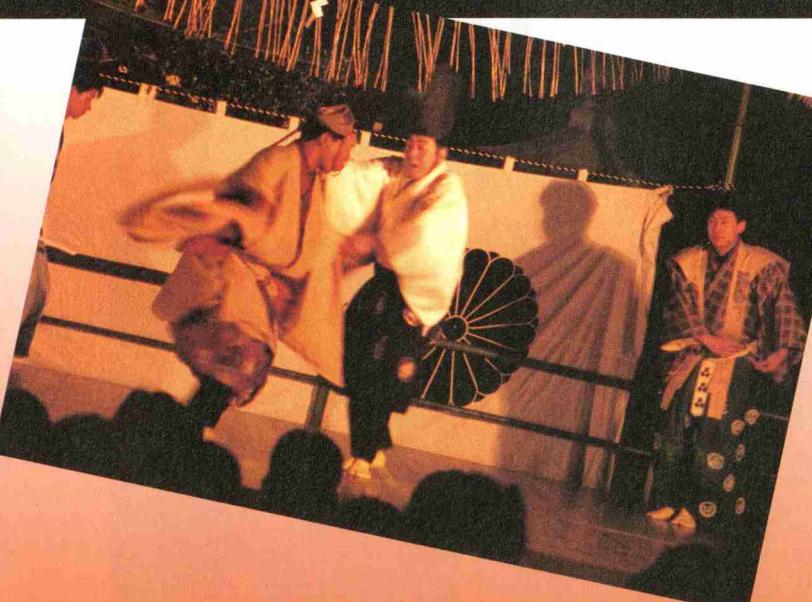
広く日本の伝統芸能を鑑賞していただこうという主旨から、まず、いちひめ雅楽会によつて珍しい舞楽「散手破

陣楽」が、ついで邦舞が舞われ、金剛・觀世流の能楽師による仕舞八番、觀世流の河村隆司師の舞囃子「屋島」、宮城会の琴「千代の寿」が演じられました。茂山正義師らによる大蔵流狂言「蚊相撲」、最後に金剛流の種田道雄師のシテによる能「小鍛冶」をもつて、五時間半にわたる催しに七百二十人の観衆もうつとりとしておりました。



幽玄の世界へ誘う……

上京区民薪能



上京区民 ふれあい文化大学

“いけばな文化に学ぶ”のテーマで、池坊頂法寺会館で開かれた「ふれあい文化大学」は、九月から十一月まで三回にわたり、六十人が講義と実技の講習を受けました。講義の一端を誌上で紹介します。

いけばな文化に学ぶ

第一回 いけばなの心と形

講師 植村 静敬先生

いけばなは形と心が加わり素晴らしい姿というものが出来た。

万葉集の中で自分が感動している歌「信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ」長野県の名もない娘さんが歌った万葉の中の民謡の種類の歌である。

一木一草の花というものが、人間にとつて大事な思いと相手に伝える文字であり、花であり媒体でなければならない。いけばなの世界でも現在感動や感謝の気持ち（心）がうすれてきた。いけ花——、立てる（人と神）——、生ける（自然と人間との対話）——、自由花（植物と人間）。なぜ原点は立て花なのか、東山文化の時代の立て花には三点の意味がある。一点 神の憑り代



として（角松）。二点、仏の供花（養護、先祖供養）拝む姿勢が立て花の姿である。三点、自己の確立（自分自身が立ち上がり神仏にむけられていた静から動、京都が崩壊して行く中から生まれた「いけ花」）の哲学、理念と技が作られ自ら感情を表現した。先人の専能の一つの言葉「ただ美しいみてくれよ」その物を否定することにより小さな花であっても立てる形その形に潜んでいる命、花の命の響きを聞きとる。

江戸中期、文化文政の時代に生まれてきた「生花」、その花をいかす花、形を作る前に植物の命をいかす民衆の花として形であり心が生まれた。

戦後の自由化、フリースタイルが生まれてくる。人間がどうあるべきか三つの形態が内容（心）をもちながら、それぞれの心、他の芸道と同じように

明治、大正、昭和、戦後、どうしていけ花が残ったか、今いきぬいてきたのは単なる装飾でなくして心の必需品だった。先人たちは魂のよりどころと命をかけてきた。開拓してくれた文化遺産がいけ花である。その文化遺産の証とは世界中の人々が花を愛したが、なぜ日本に生け花が生まれたのか、花は愛の次元を乗り越え、花の美しいといいう次元も乗り越え、一つの精神文化まで

昇華させた。日本人は素晴らしい民族である。どのように昇華させたか。花は咲き、やがて散ってゆく、二つの問題がある。生命の本質を正す時、植物芽が吹き茂り実になり蓄が枯れていく。日本人は三つの蓄を作ってくれた。硬い蓄からやがてふっくらと開いて、笑つてゆくだろうとプロセスを示してくれた。散つてゆく時のむなしさ、人と花の生命の共感を得ながら対話し、かかわりにより骨組となつて生を受けながら、やがて散る無情感から日本の文化が華道であり茶道であり芸道である。育てたものは風土、宗教、その時代の形態が生まれ、飛花落葉論、すばらしい日本の哲学が育つた。命をかける道が華道であり茶道であり芸道である。主張である。日本人だけに判る美であり意識である。宗教は古代素朴な山岳仏教から生まれ、山は神に近づき登らせて頂き、自然の恩恵として谷川の水により米作社会を形成している。又太陽を神として崇め山は憧れであった。緑木崇拝仏教では大日如来であり、神の聖なるものの姿は立花である。日本の特殊な文化が形成され「花はあわれに眺めたい」。万葉につづく一つの表現であり愛花思想へと変わり、花と会

話が出来る。

立て花は円花たるべし。円花は丸くなればならない。作品にした背景に心、慈悲の心が二つそなわったものが、あらゆる人に施し、形だけでなく心を加えたら姿が出来た。

姿とは、らしさ、演出をする、誇張する、姿は個性であり、粹にいける、いけるその心の中に研ぎすまされたよな粹な心がなければ、粹な姿は生れこない。その理念の確立から技に走ることなく文化として育ってきた。生け花はこれからも未来永劫において人々に愛されていくだろう。

第一回 いけばなの歴史

講師 西村 勉先生

現在花を挿す時は花瓶に生けると云うが、池坊では花は立てる。十世紀頃には花をさすと云っていた。いけ花といふ技術はなかった。

室町時代、池坊先祖である専慶のいれた花を見るために群衆が押しよせたという。当時のいけ花は本木と下草で構成され「立て花」と呼ばれていた。十五世紀の中頃、いけ花の実際の形は

中央に仏像、左右に脇仏、下段中央に香、左右に灯火花（仏様にお供えする花）燭台は対、立て花の基本は天長地久諸仏列座主君安全、池坊では下京の町衆の寄合い場所で仏さまにお供えする花、年中行事の節々に花をいた。

生活の中での祝い事などにも花をいたることが多かつた。十六世紀の前半、池坊専応によつて新たな発展がもたらされた。応仁の乱以後うち続く戦乱の果てに見出した草木のいのち、風興をもととするいけ花が成立した。専応は

花伝書『専応口伝』にその真髓を示した。それは従来の挿花のように単に美しい花を観賞するばかりでなく草木の風興をわきまえ、「野山、水辺おのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざり、よろしき面かげをもとし」たものであり、單なる遊びごとではなく花をいけることによって悟りに至る自覚をもつ「いけ花」であった。この思想は現代に至るまで変わることなく伝承されている。十七世紀の初めに活躍した専好は、不世出のいけ花の名手といわれて立華を大成し、親子二代で後水尾天皇が宮中で花会を催されるたび指導をしていた。立華の黄金時代が過ぎ、二代目専好の弟子たちにより十七世紀後半、いけ花は大衆の間に広まつ

た。江戸中期、専定が生花を確立させ、

池坊はいけ花の家元として代々多くの人々を指導した。

第三回 いけ花デモンストレーション・レッスン

講師 柴田 英雄先生

最初に先生により池坊伝統的様式である、立花、生花、自由花とユーモラスな話し方、巧みな手法で草木の風情を重視しながら気品と風格を高めた生けこみを披露して下さいました。

花鍔を動かされる手元ばかりを見ている中に、すばらしい芸術作品が次々と出来上がるのを見学し、池坊いけ花は発祥の源であることを実感しました。生ける心得、色彩、形（線のもの面のもの）、四季感、花の命を大切に、いけ花の役枝、真、陽方、陰方、副、体、語り合いながら変化に願いを込め生ける。草木と人間の立体感を表す。いとしむ心、消える心、残ったものの中に生きる。一本一本を大切に、去るもの



氣の中、呼吸を合わせて生けこむ姿を

拝見、出来上がった作品の見事さに、ただ感動するばかりでした。精神的な対話の中で技術を磨き、いけ花文化が若い世代に形から心へと伝承され発展面からも教養を深め、人間と植物とのし続けていることを確信しました。

EVENT

第3回

ふれあい 史蹟ウォーキング

—内野（大内裏の故地）を歩く—

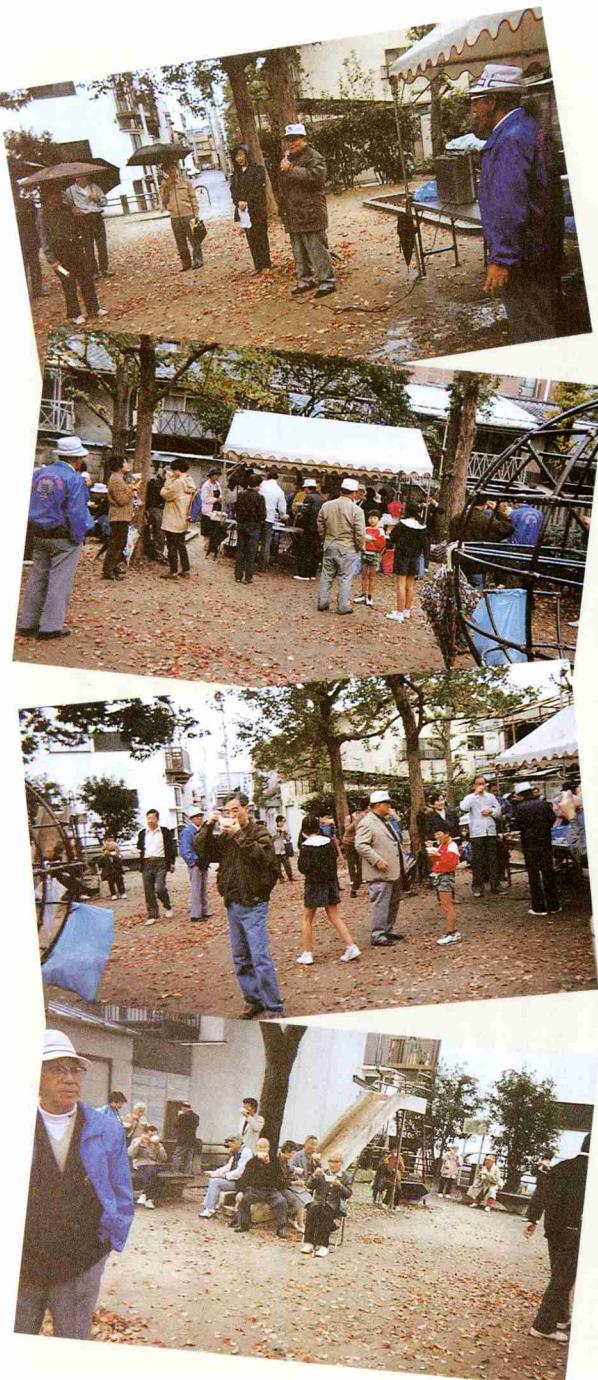
回を重ねること三回目を迎えた上京歩きました。

区民ふれあい史蹟ウォーキングは、十一月二十一日に「内野を歩く」という主旨で行われました。この日は時々雨もようのために、例年より参加者が減りましたが、約三百人が、大極殿跡、淨福寺、大將軍八神社、法輪寺を巡り

上京区の西南部にある大内裏の故地を訪ねました。参加者はそれぞれ四ヵ所のポイントに集合し、ガイドマップにしたがって四キロ余りのコースをたどります。

今回は平安建都一千二百年を前にして、沿って南下、奥渓家住宅などを見ながら、達磨寺で知られる法輪寺で楽しく法話を見たあと、下立売通を経て出发点に戻り、温かいせんざいの接待を受け解散しました。

他の班も、それぞれ同じコースをたどって、あまり知られていない上京区の史蹟に触れた半日を過ごしました。



夷川五色豆



豆 まめ 政 まさ

本店／〒604 京都市中京区夷川通堺町東
TEL.075(211)5211~3
三条店／〒604 京都市中京区三条通河原町東
TEL.075(255)0390

イタリアが好き！
イタリア料理専門店

レストラン

フクムラ

河原町店 中・六角河原町東入 255-5733(火・休)
四条店 中・富小路四条上ル 255-2060(水・休)
(株)イタシヨク(イタリアワイン・食品輸入元)(小売歓迎)
北・紫野大徳寺門前町 491-0900

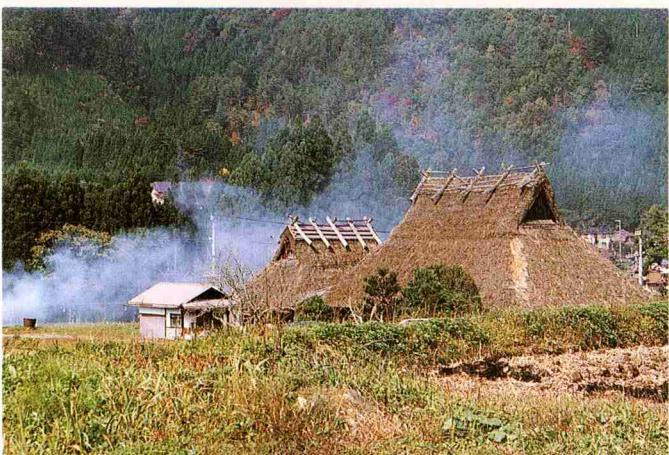
EVENT

上京区民 写真コンクール



上京区長賞 塩見 全一

上京区文化振興会では、九月に上京区在住の写真家浜岡昇氏を講師として「写真教室」を開きましたが、その参加者の作品も含めて、写真コンクールを行いました。その結果、多数の区民から八点の作品が寄せられましたが、浜岡氏をはじめ文化振興会の役員によって審査し、上京区長賞に塩見全一「子供のお店やさん」、上京区文化振興会会长賞に樋口正三「晚秋」のほか、優秀賞五点、佳作十点を選び、十二月二十日に上京区役所で表彰式を行い、区役所ロビーに展示しました。



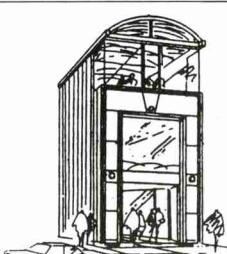
上京文化振興会会长賞 樋口 正三

優秀賞・一井田清「ゲームを楽しむ親子」・卯瀬栄二「立秋」・西田実「ボク・頑張れ」・山口容常「さあ、やってごらん」・吉川善之助「永観堂大屋根」
佳作・奥田勝「平癪への祈り」・楠江勇「おはなし」・塩見全一「いやー／＼おもちが落ちた」・中西稚裕「きれいだな」・西田実「折り紙はむつかしい」・山内早夫「ゆく秋」・山口容常「欠席」・樋口徳三「お見ごと」・福住富雄「梅花祭野点」・和田庄次郎「木洩れ日」

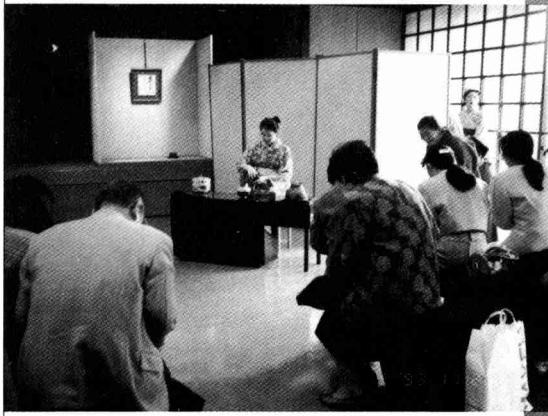
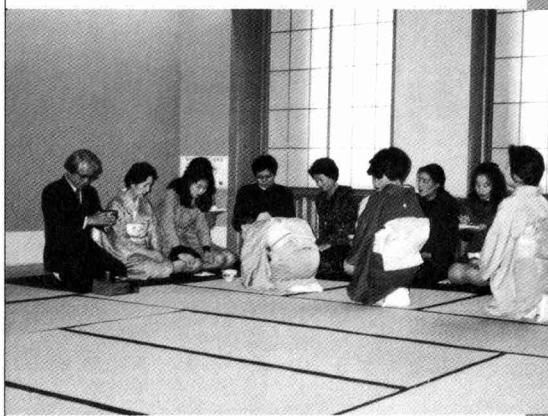
TOKIYA
SINCE 1926

とわ
ぐすり指に永久の祝福を

永久の愛を誓う輝き、ミキモトのブライダルジュエリー。
婚約指輪、結婚指輪、結納返送のメンズジュエリーなどを多彩に取り揃え、
幸せなおふたりのご来店をお待ちしております。

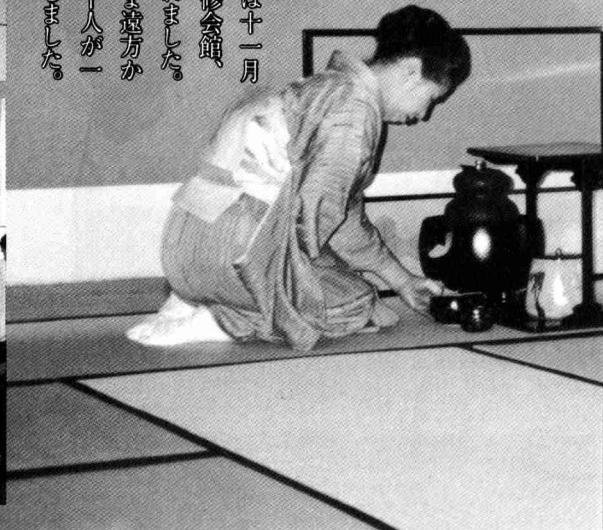


メガネ・宝飾・時計
トキヤ
地下鉄鞍馬口
TEL 075-432-4348



秋の
区民茶会

平成五年秋の上京区民茶会は十一月二十八日に、本席を裏千家研修会館、副席を裏千家センターで行われました。上京区民だけでなく、たまたま遠方から訪れた方々も合わせて五百十人が一碗の茶に秋のひとときを過ごしました。



会記（本席）

待合席 淡淡扇画賛 時雨傘の絵
床 鵬雲斎御家元筆 知足常楽歓

花 榛 雪椿 白菊
花入 焼メ 紀州窯栖豊造

香合 根来平丸 治兵衛作
風炉先 鵬雲斎御家元好

金 六瓢釜 与富作
風炉 道安風炉 宗元造

棚 鵬雲斎御家元好平悠棚 秀斎作
水指 下膨 膳所窯

薄器 鵬雲斎御家元在判

銀杏唐草 玉栄作

茶杓 鵬雲斎御家元作 銘清友
茶盃 鵬雲斎御家元箱

銘無事 十代大樋造

替 鵬雲斎御家元箱
萩 陶兵衛造

吹き寄せ 香雲造
鵬雲斎御家元箱

蓋置 一葉 治郎兵衛造

建水 毛織
茶葉 上林春松詰

園の菊 鶴屋吉信製
茶華の目

寄せ木 火入 織部

煙草盆 淡交会五十周年記念菓子器

永年の信用と実績
真心のこもったご奉仕

葬祭センター 株式会社

公益社

本社

烏丸三条下ル☎(075)221-4116(代)

北 公 益 社 / 京都市北区紫明通堀川東入
中 公 益 社 / 京都市東山区五条通東大路東入
南 公 益 社 / 宇治市横島町(文教短大前)
滋賀公益社 / 大津市朝日が丘一丁目

☎075(431)7121(代)
☎075(551)0042(代)
☎0774(20)0042(代)
☎0775(23)0042(代)

読者の大原口の声

前回の正解は

大原口の道標

○西陣で奉公していた頃、月二回の休日には西陣京極の映画館へ洋画を見に行つたことが思い出されます。

(翔鷺・中江佐一郎)

○明治四十年頃の遊び場所、芝居小屋・映画館等なつかしく読みました。

(乾隆・大町政之助・91歳)

○幼い時から母や祖母から京都の話を聞きました。伝統を重んじる京都の風情がよく出ています。

(小川・高口真也・中3)

○祖父は「上京」を読むなり、クイズの正解を教えてくれました。その祖父がまだまだ勉強させてもらわなくてはといつておられます。

(桃園・中村多栄子)

○日常生活の周辺には歴史がいたるところにあります。本誌で改めて周辺を意識してみる大きさを感じました。

(桃園・高橋幸宏)

○上京の歴史がよくわかり、いつも楽しみにしています。(春日・湯川雅也)



上京クイズ

これはどこでしょ？

○正解の中から抽籤にて二十名の方に記念品をお送りします。

○締切 平成六年 四月 十五日

○正解と住所・氏名・電話番号を記入の上

〒600-2 京都市上京区今出川通
室町西入 上京区役所地域振興室



編集後記



表紙の写真

撮影者／浜岡 昇氏
場所／京都御苑内

■昨年十月十五日に百一歳で亡くなつた正親学区の竹内四郎さんから、その四十日前に編集子がいたいた手紙の一
部——老生六十歳の頃の記事で百
年前のことが再び思い出されました。
その頃の催し物や町の有様が又思
い出されます。もう一度、その頃の町の様
子を再現したいものです。――

▼次号は建都千二百年を記念する特集号を考えています。区民に愛され定着する『上京史蹟と文化』を目指して発行したいと思つております。(い)

「上京史蹟と文化」は、区内の文化や史蹟、学区の文化活動の紹介を通じて、文化とのふれあいの場づくりをはかることを目的として、上京区民ふれあい事業実行委員会と上京区役所が発行し、年二回、上京区全世帯に配布しております。

断ちきろう 身近な差別を 私から

—日本の行事 五節句 世界に翔く—

上京・史蹟と文化 第六号 平成六年三月十五日 発行

上京区民ふれあい事業実行委員会 編集・主管 上京区文化振興会・上京区役所 印刷 和光印刷株式会社

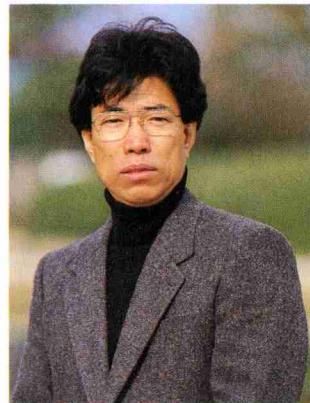


元宮内庁京都事務所長
財団法人有職文化協会理事長 石川 忠

(五節供)

人日の節句
上巳の節句
端午の節句
七夕の節句
重陽の節句

一月七日
三月三日
五月五日
七月七日
九月九日



前京都国立博物館技官
大手前女子大学文学部教授 切畠 健

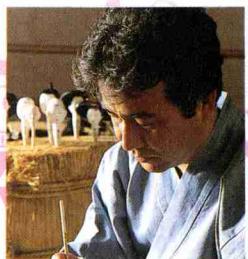


(御家紋付)

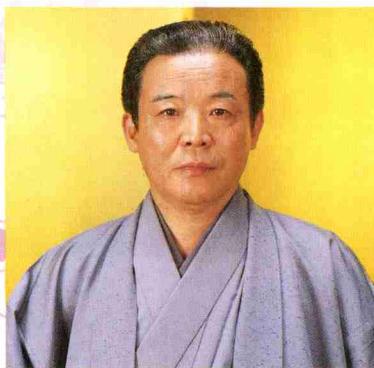


お子様の
ご成長を願う――。

有職司



有職司 山本正明。



六世 島津豊泉



有職司 井上 競

